

広重の旅と名所絵③

広重の旅

江東区深川江戸資料館

歌川広重が描いた風景は、住居があった江戸にとどまらず、全国各地に及んでおり、しかも高いリアリティをもって表現されています。リアリティの高さは広重作品の特徴の一つであり、広重の旅の逸話とともに、実景写生にもとづくものとして長らく理解されてきました。しかし、広重の旅は伝承によるところも多く、資料的根拠が薄い旅については、旅そのものを疑問視する向きもあり、作品と旅の関係はあらためて検証する必要があるといえます。とはいえ、広重の旅の中には、旅日記やスケッチ帳が残っているものもあり、旅の実態に迫ることは可能です。今回は、旅日記が残っている甲州と房総の旅を取り上げ、広重の旅の実態をみていくことにします。

1. 広重の旅日記

現在知られている広重の旅日記は次の4種類です。

- ①『甲州行日記』（天保12年(1841) 4月2～23日）
- ②『甲州日記写生帳』（天保12年11月13～22日）
- ③『鹿野山行日記』（天保15年3月23日～4月1日）
- ④『房総行日記』（嘉永5年(1852) 閏2月25日～3月7日）

①②は甲府、③は上総、④は上総・安房を旅した時の日記および写生帳です。②は写生帳ですが、最後に日記がつけられています。

①、③、④の原本は、大正12年(1923)の関東大震災で焼失しましたが、原本を実見した研究者が写本を作成していたこともあり、日記の内容は現在に伝わっています。②の写生帳は、明治末期には海外に流出していたようで、その存在は知られていたものの、長らく所在不明となっていました。



図1 EDWARD F. STRANGE『THE COLOUR-PRINTS OF HIROSHIGE』(1925)で紹介されていた『甲州日記写生帳』。

しかし近年アメリカで発見され、日本への「一時帰国」も果たしています。

それではこれら4種類の旅日記を手がかりに、これから広重の旅の実態に迫ってみたいと思います。

2. 甲州旅行の目的

天保12年、広重は甲府道祖神祭の幕絵制作のため、甲府に向かいました。甲府道祖神祭とは、毎年小正月に甲府城下で行なわれていた祭礼です。各町では道の両側を縦1間(約1.8m)、横5～8間の巨大な幕絵を何十枚も用いて飾り立て、華麗さを競い合いました。町によっては江戸の絵師を招いており、広重の甲州行きも緑町一丁目の依頼によるものでした。

表 甲州旅行の旅程

月 日	行き先
4月2日	江戸～八王子
4月3日	八王子～野田尻
4月4日	野田尻～黒野田
4月5日	黒野田～甲府
4月6～23日	甲府
4月24日～11月12日	(日記なし、不明)
11月13～19日	甲府
11月20日	甲府～上花咲
11月21日	上花咲～与瀬
11月22日	与瀬～府中

3. 甲府までの旅

甲府までの旅については①に詳しく記されています。

○旅先での出会い、道連れ

日記には途中で出会った人たちと気軽に交流している様子が記されています。広重は、同じ方向の人がいれば、道連れにしています。道連れとなった人たちは、江戸の庶民や諸藩の武士など様々で、また広重にとって「甚面白し」という人たちもいれば、そうでもない人たちもいたようです。話をして気障りな感じがした人たちとは離れたとも書いてあります。

宿屋でも客同士で色々な話をしています。野田尻宿(上野原市)で一緒になった桑名藩士には、居合い抜きの見学を願い、その姿をスケッチしています。

○茶屋・宿屋

広重は茶屋や宿屋の様子を日記に記しています。また食べたものも記録しており、口に合わなかったものは「まづし」といった感想を添えています。広重は甘いものが嫌いではなかったのか、「大まんぢう塩あんを喰」、あるいは「団子四本喰ふ」という記述がみられます。余談ですが、箱根への旅のスケッチを浄書した『武相名所旅絵日記』では、「立斎饅頭を喰図」と題して、饅頭を食べ

ている自分自身（立齋、広重の号）の姿を描いています。

○景観・風景

甲斐に入ったあたりから、景色を「絶景」と賛美する記述が増えていきます。例えば、鳥沢（大月市）から猿橋（大月市）までの景色について「甲斐の山々遠近に連れ、山高くして谷深く、桂川の流、清麗なり。十歩二十歩行間にかはる絶景、言語にたへたり。拙筆に写し難し」と記し

ています。写本の補注などによれば、原本には猿橋や大月などのスケッチが挿入されていたとあります。



広重は自然だけでなく、農家の便所や、小さな水車（広重は「水車の孫」と評している）といった、ささやかだけれども、気になったものもスケッチしています。またスケッチはありませんが、例えば八王子周辺の織物業や勝沼（甲州市）の葡萄栽培など、各地の生業にかかわる景観を日記に記しています。

○甲府に到着

広重は、甲州道中を3泊4日かけて、甲府まで歩きました。甲府に到着すると、風呂に入り、月代を剃りました。翌日の幕絵制作の世話人たちとの対面に備えて、身支度を整えたものと考えられます。

4. 甲府での滞在生活

甲府での滞在中の様子は①と②から知ることができます。

○広重の作画活動

広重は、幕絵制作の世話人たちと打合せをした後、幕絵の制作にとりかかっています。また日記には幕絵以外にも、襦袢や屏風、襖絵などを制作していることが記されており、実際この時制作されたと思われる作品が現存しています。江戸からやってきた広重に作画を注文する人は多く、広重もそれに応じたものと思われま

○甲府城下での楽しみ

甲府滞在中の広重は、甲府で開催されていた芝居や祭礼を見物するなどしています。また狂歌の会合や酒盛りに参加したことも日記に記されています。甲府の人々との交流を楽しんでいたことがうかがえます。

○身延道、御嶽道の旅

②の写生帳には、甲州道中、身延道、御嶽道沿道の風景が描かれています。スケッチによって広重は甲府から先へも足を延ばしたことがわかります。

5. 天保15年の房総旅行

—鹿野山・白鳥神社祭礼—

広重の房総旅行については③と④によって知られています。甲州の時とは違い、房総旅行の目的はわかりません。しかし、天保15年の旅は、鹿野山参詣やその付近にある白鳥神社の祭礼見物が目的だったようです。

広重は久津間村（木更津市）の早松氏宅を拠点にして、あちこちに出かけたようです。鹿野山へは白鳥神社例祭前日（3月27日）に行き、そのまま門前の旅館に宿泊し、翌日祭礼を見物しました。祭礼前日の旅館は、「旅人込合、夜具不足にて二人もやいな」と、一つの布団を二人で寝なければならぬほど込み合っていたとあります。祭礼については「参詣商人群集す」と述べており、大いに賑わっていたことがわかります。

ところで広重の旅日記には酒盛りの記述がよく出てきます。広重は、江戸に帰る前日の酒盛りで大いに酔っ払い、酒席から帰る途中で川に足を踏み込んでしまい、「少々めいわく」と記しています。

6. 嘉永5年の房総旅行

—房総一周の旅—

嘉永5年の房総旅行は、房総半島をほぼ一周するものでした。閏2月25日に江戸を船出し、翌日木更津に上陸すると、鹿野山を参詣し、外房の鴨川方面へ出ます。広重は浜荻村（鴨川市）の日高氏宅に滞在し、誕生寺と清澄山へ参詣に出かけています。その後は海岸沿いの道を南下し、和田（南房総市）から内陸部に入り、那古（館山市）に出ています。そして那古観音や保田羅漢（日本寺）を参詣し、3月6日に江戸へ船で帰ろうとしますがかなわず、翌日も帰れずに木更津にとどまっているところで④の日記は終わっています。

広重は、清澄山や誕生寺からみた眺望を「絶景なり」、「風景よし」と評しています。また鴨川一帯の磯辺の風景に対し、「此辺すべて磯辺。浪打岩石多く、風景尤絶妙にて筆に尽し難し」と記しています。内房でも気に入った景色があったようで、「風景よし」と綴っています。とはいえ、広重は「絶景」と評した景色を作品として取り上げるとは限りませんでした。

旅と絵に関して興味深い点といえば、広重は清澄山付近で見かけた頭に物を載せて商いに出る女性の姿を④に記録し、「山海見立相撲 安房清住山」などの清澄山を題材とした作品で実際に描いていることです。清澄山だけでなく、広重作品の中には、広重の目をひいた、実見しないとわからないような、各地の「土地柄」を反映した事物などが描きこまれている可能性があります。そしてそれは広重の旅を知る手がかりになるものと思われま